

昭和二十五年七月十五日發行（毎月一回十五日發行）（通第十六号）  
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

求道的意義に於ける  
横超金剛心の體驗…………近角常觀（1）

ながく生死をへだてける……花田正夫（4）

薄紙一枚がと邪定聚唯歎じ……山下成一（7）

仰ぎましようよ慈光……松村繁雄（10）

信味點滴…………（14）

## 次

### 目

# 慈光

第一卷・第七號

# 求道的意義に於ける

## 横超金剛心の體驗

近

角

常

觀述

法然上人が選択集に於いて如來の選択本願を説かるる時、諸佛の淨土には或は菩提心を以て往生の行因と爲すの土ありと、言ひて、菩提心も諸行の一として之を選び捨て、専ら念佛の一を行を選び取るが故に選択というと書かれてある。是が當時における大問題として念佛禁止と聖人流罪の原因となつた一である。

抑々佛道修行に於いて菩提心は其第一出立である。發菩提心なくして念佛一行といふは偏見である、邪見であると呼号されたのが樅尾の明惠上人である。上人は摧邪輪、莊嚴記を書きて大反対をせられた。現に大無量壽經に發菩提心一向專念無量壽佛とあるではないかという主張である。

法然上人は既に一向專念無量壽佛とある以上は菩提心が發せらるならば一向專念無量壽佛ではない、第十八願には發菩提心はない、念佛一行である、故に選択本願念佛であるという大德音であると反駁せられている。

の諸佛の出世のみもとにありしき、大菩提心起せども自力かなわで流转せり。とある。

この自力の菩提心の得られぬ衆生に與えたまゝ一向專念の一行なれば、明らかに如來廻向の大行である。故に明らかに是れ凡小自力の廻向に非ず、かかるが故に不廻向の行と名ずくるなりと仰せられた。

此の如く自力廻向の菩提心に非ず、他力廻向の大行大信なるが故に、此の信心を淨土の大菩提心と、親鸞聖人は積極的に大獅子吼せられたものである。

親鸞聖人が菩提心に就いて堅出・堅超・横出・横超の二雙四重の判別せられたのも、從來の如く他の宗旨の教相判別とする誤りである。教行信証には明らかに菩提について、堅横超の別あることを極説せられたるは、求道的意義を以て自力他力頓漸二教について、其の実驗的躰得を光闇なされたものと讀仰すべきである。

自力聖道の教はこの身を以てこの土に於いて自ら成佛せんと努力するものなれば、堅の求道である。若し煩惱を断じて涅槃の理想を追うも遂に退轉するは、堅出自力の求道である。若し煩惱即菩提、生死即涅槃と超せんとすれども、自力唯心に沈淪して畢竟空虚なる唯心の彌陀、己心の淨土に終るは堅超自力の金剛心にして、聖道の大菩提心の不可能なることは、求道的意義に於て歎然である。

此の如く堅の菩提心は、自分を以て自分を制御せんと欲す

抑々菩提心ということは上求菩提下化衆生、ということである。即ち求道心である。然し我々が眞面目に道を求むれども、求むれば求むる程得ること能わぬのである。古の聞法求法の人々が泣くのも是れである。吾人が人生問題に煩悶して如何ともすべからざるものも是れである。此時此道を求めて得らざる我等を憐れみ給う。大慈大悲の親心が選択本願である。

是即ち念佛の一行である。故に明らかに道を求めて得られざるものに與え給う慈悲そのものが念佛である。故に法然上人が菩提心を發し得ざる者のための選択本願なりというは、求道的意義に於いて吾人の実験するところである。

親鸞聖人の教行信証には明らかに此の選択集の發菩提心について消極的積極的に詳論されたものと見ることが出来る。法然上人が選び捨てられたる菩提心は即ち自力の菩提心である。聖人が和讃に、自力聖道の菩提心こころもことばも及ばれず、常没流轉の凡愚はいかでか發起せしむべき。三恆河沙

るが故に、遂に不可能に終るのである。此に於てや他の力によりて、成佛せんとするが即ち横の菩提心である。然れども定散自力三輩九品の相對的努力は、畢竟理想的の佛陀、靜觀の淨土にして、淨土門とは云いながら、自力幻滅の結果を持ち來すものである。是れ即ち横出の菩提心である。最後に於て絶對他力の横超の大菩提心なるものは、他より威大なる神力を加えて、我等が相對的闘争心、即ち不斷煩惱の五分五分心を大慈大悲を以て買ひ込んで下さるものであらねばならぬ。俗なる譬喻を以て形容すれば、人生相對界に五分五分を以て闘争する時は、徹頭徹尾永劫止むときはない。是れ即ち曠劫よりこのかた、常に没し常に流轉する有様である。然るに他に我等の五分五分の止むべからざるを了解して、飽くまで五分五分を離れたる大慈大悲を以て、我等の闘争を横側より買ひ取つて下さるが即ち五劫思惟の願である。永劫修行の苦勞である。その大慈大悲は我求めざるに彼我を求めて與えたものである。是が如來廻向である。淨土の大菩提心である。

五劫思惟の昔、世自在王佛法藏比丘の爲に經を説いて曰く「譬へば大海を一人あつて升量せんに、却數を経歷して、底を窮めて妙宝を得べきが如し、人生心に精進して道を求めて止まざるあれば皆當に刺果すべし。何の願をか得ざらん」と。是れ如來が我等が爲に道を求め給いたる始である。而して永劫修業に於いて我等が貪欲・瞋恚・愚痴の心を憐みて、如來が無貪・無瞋・無痴の行を爲し給うは、我等が五分五分の心を憐みて、五分五分を離れたる心を以て買ひ込んで

下さるのである。我等が自害・害彼・彼此俱害に對して、如來が自利・利人・人我兼利したものは、我等が鬭争を横側より無闇争を以て引取つて下さるのである。

和顏愛語・先意承聞というは、徹頭徹尾不斷煩惱の我等を満足せしめて、喧嘩を根絶さして下さる、即横超・藏五惡趣である。是れ即ち横超金剛心の體驗と謂つべきである。

教行信証の信卷下の初めに

「眞実の信心は即ち是れ金剛心なり。金剛心は即ち是れ願作佛心なり。願作佛心は即ち是れ度衆生心なり。度衆生心は即ち是れ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむるの心なり。是心すなはちはれ大菩提心なり。是心すなはちこれ大慈悲心なり及至。論註に曰く、彼の安樂淨土に生ぜんと願ずるものは、かならず無上菩提心をおこすとのたまへり」

とあるのは、淨土の大菩提心の大音宣布である。

又歎異抄第四條に

「慈悲に聖道・淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふはものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれどもおもふがごとく、たすけとぐること、きはめてあゆがたし」というのは自力理想の菩提心の下可能に行き詰つて泣く外ない體験である。理想を高く掲げつゝ行き詰つていた人々が此教訓に接し俄然として轉向の動機となつた場合が妙ぐない。かくの如く理想の幻滅・努力の破産に泣きて、如何ともなすべからざるを憐み給う大慈大悲が即ち淨土の慈悲である。この如來が吾等を助けるが爲に、「設ひ我佛を得んに」

と作願し給うが願作佛心である。其如來の作願が「我等を濟度せずんば正覺を成らじ」と誓い給えるが度衆生心である。この願作佛心と度衆生心を念佛の一つにて頂くのが淨土の慈悲である。故に同抄の第四條の次の文に

「淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて、大慈悲心をもて思ふが如く衆生を利益するといふべきなり。今生にいかにいとほし不便と思ふとも存知の如くたすけがたければこの慈悲始終なし、しかれば念佛をのみぞ未徹りたる大慈悲心にて候ふべき」。此の如く如來廻向の大慈大悲より願作佛心と度衆生心とを頂きそれがそのまま徳相還相の廻向具足したる大積極の横超金剛心なりと極言されたるが、法然上人の選択本願に対する親鸞聖人の絶対他力の信樂である。

### 選 擇 集 要 文

それすみやかに生死をはなれんとほつせば、二種の勝法の中には、しばらく聖道門をさしおきて選び淨土門にいれ。淨土門にいらんとほつせば、正雜二行の中に、しばらくもろもろの雜業をなげうちて、選びてまさに正行に歸すべし。正行を修せんとほつせば、正助二業の中には、猶助業をかたはらにし、えらんでまさに正定をもはらにすべし。正定の業といふは、すなはちは佛命を称するなり。名を称すれば、かならず生ずることを得、佛の本願に依るがゆへなり。

## な が く 生 死 を へ だ て け る

花

田

正

夫

歎異抄三條において親鸞聖人は惡人救濟の至極を述べられ

て

「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあはれみ給ひて願をおこし給ふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみ奉る惡人もとも往生の正因なり」

と示されている。この仰せ一つにほんとうにきき耳立てて

下されば「本願他力の意趣」が我身一つにいただける。

煩惱具足とは貪欲・瞋恚・愚痴の三毒の煩惱を本源として

そねみ・ねたみ・のろい等の心が常に身につきまとつてい

る。かかるわから、即ち「かかるあさましい親鸞は」、との意味である。いづれの行にても、どんなに焦ろうが励もう

が、頭燃を拂うようにして見ても眞実なことは一つも出来ない、皆々消えて行く、崩れてしまふ、壊れて行く。金輪際か

かる身には生死をはなれるなどとはこころも、ことばも及びもつかぬことである。石が水に沈んで行くように、惡へ惡へとおちて行く外はない。

蓮如上人の御一代開書の二十一に

「七月二十日御上洛にて、その日のたまはく、五濁惡世ノワレラコソ、金剛ノ信心バカリニテ、ナガク生死ヲステハテ、自然ノ淨土ニイタルナレ。この次、金剛堅闥ノ信心ノ、サダメルトキテマチエテゾ、彌陀ノ心光照護シテ、ナガク生

死ヲヘダテケルをも御讚歎ありて、この二首の讃のこころをいひてきかせんとてのほりたり、と仰せ候ひき、さて自然の淨土にいたるなり、ながく生死をへだてる、さて／＼あら／＼おもしろや／＼と、くれぐ御詫ありけり」蓮如上人が文字通りに踊躍歡喜、破顔満悅、躍動されてゐるのがうかがわれる。ここ一つを話したいばかりに上洛したのだ。ここ一つをよく聞いておくれ、有り難いではないか、不思議ではないか、さて／＼あら／＼おもしろや／＼！

「南山に鼓を打てば北山に舞う」という故実があるが、全くその通りである。ながく生死をすてはてて自然の淨土にいたる道が明らかに開かれた蓮如上人が手の舞い足の踏むところを知らず大慶喜された御姿がまさ／＼と見える。然もこの道は器量のすぐれた特定の人にはのみ開かれる門ではない。「五濁惡世のわれら」即ち一切人・道俗・貴賤・智愚・善惡のへだてなく、萬人の前に常に公開された大道である。門は開かれてあるが、唯、我執我慢の扉が堅く閉ざされているのだ。ここに蓮師が、ここ一つをきいてもらい、ここ一つを味つてもらい、ここ一つを話したいばかりに上洛したのだ、というお呼びがある。

愚・善惡のへだてなく、萬人の前に常に公開された大道である。門は開かれてあるが、唯、我執我慢の扉が堅く閉ざされているのだ。雨はわけへだてなく降るが山上にはとどまらない、水は常に低きに流れる。我慢我執の心、渴愛無明の煩惱こそ自ら道を塞ざす根源である。

自我を中心として佛法を聞けば、その人においては仲々自覺し難いが、実はそのこと自体が、佛を殺し祖師を殺し奉る

大逆惡なのだ。逆説の死骸であるのだ。原來佛道を習うとうことは、佛の取り給うものを取り、佛の捨て給うものを捨てる。即ち佛意に隨順することであるのに、佛道を学んで、自己の修養にしたい、悠久不動な心になりたい、不屈の心を護たい、などと願い求めることが、立派な自己を造るために佛道を求めているので、言いかえれば、佛法を自我の奴隸にして使傭人にしたい心である。そこを求道の士が自ら反省せられる時、冷汗三斗、大懺悔の外はない。佛を拜み佛を尊んでいたまんまが、実は自らを價值づけ、他を見下す大憍慢心であつたと知らざるところに、コロリと轉落して、佛の御本願はかかる誇法の徒、逆惡の輩にこそ「たとへ身を諸々の苦毒の中におくとも、我が行は精進にして忍んで終に悔いじ」の御悲心ましませしかと、且は謝し、且は懺するばかりである。

ここにおいて「佛法は無我にて候、いささかも我はと思ふところあるまじく候」との佛の大慈悲心一つ、本願の念佛一つに、何のはからいもなく、何のおもんばかりもなく隨順申すればかりである。自力の我慢我執が碎けて、佛力の清淨真実の本願力一つのはたらきとなるのである。

「爾れば、大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮びねれば、至徳の風靜かに、衆禍の波轉ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到りて、大樂涅槃を證し、普賢の徳に達ふなり」

ながく生死をすてはてて自然の淨土に到る道を開ける風光

穴を穿つように、自己中心の見地に立つて聖人を自己の我見で画くことは誠に申し訣なきことである。

である。親鸞聖人はこれを「自然」と示され、「無義」と訓えられ、蓮如上人は「無我」と述べられている。同一念佛にして別の道ではない。

ここに於て、いづれの行にても生死をはなることあるべからざる煩惱具足の身が、佛の不可思議力廻向によつて、二度と生死に墮しきりになることなく、罪障をそのまま功德に轉じさせて頂く、障り多きに徳多き道が開かれるのである。然も飽くまでもそれは無能無力の我が計らいは微塵もなくて、ひとえに願力の御催しによる。即ち煩惱を断ぜずして、涅槃分を得させで頂く道である。

超世の悲願一つに不可能の可能化が顯現する。不可思議界が展開される。人間的根本的大革新が斯行される。

阿闍世が「我無根の信を獲たり」と佛に申し「我今未だ死せずしてすでに天身を得たり、短命を捨てて長命を得たり、無常身を捨てて常身を得たり」と菩薩大臣に告げたところである。又山伏辯念が「山は山道は昔にかはらねど變りはてたる我が心かな」と口詠んだところである。

生死海にあつて生死海を超えることによつて生死海に自由に入り、溺れず沈まず、染まらず汚れぬ無碍の一一道が聖人の歩まれた淨土への道であつた。

大菩薩を見れば、愚痴無智の凡愚者、泥凡夫かと見れば淨界を自在に飛翔される聖人である。魚は釣すべく、鳥は網すべし、独り龍は池底より躍り出て天界に没する。けに巨龍こそ聖人の眞姿である。唯恨むらくは蟹が己が甲羅に相應じた

老來りて始めて道を行ぜむと待つ事なかれ。ふるき墓、おほくはこれ少年の人なり。

其の物につきて、その物を費しそこなふ物數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

# 薄紙一枚がと邪定聚唯歎じ

山

下

成

一

正信偶に善導大師は開口一番、矜哀定散與逆惡と述べられて居られます。悪人を正機とする御本願の御至極より伺え  
ば、逆惡を矜哀し給う理は、よくわかりますが、定散善までも矜哀し給う譯が、いささか不審に思われるるのであります。  
然も大師はその初め定散をかけ、逆惡を後に廻された所以を見れば、定散善こそ、却ていよいよ逆惡にも増して、先ず  
矜哀せねばならぬとし給う深い意義が含まれる様に頂けるのであります。定散の善、それは心をひそめて佛に近付かんと  
する殊勝な態度、又、惡を廻し善を修めて佛意に適わんとする善美の心盡し、何とて是れが逆惡に伍し得ましよう。況ん  
や逆惡より先ず救わねばならぬとする大師の御企図が直に首肯されましょや。然し乍ら、その定散善が如何に立派であつ  
ても、念佛にまさるべき善ではなく、然も、太陽に比すべき電燈乃至螢火にも等しき凡夫の善に過ぎない事を打ち忘れて、  
て、消長明滅限りなき小善を力に或は誇り、或は御救の助けにせんまでに思い上り、終にその小善小美に目がくらんで、  
直に佛陀無辺の大悲心を感戴し難き事になつて居りますので、始めから逆惡を知れるものよりも、大悲の御救いに近づき  
得ない事になりてゐるのであつて見れば、大師の御親切心から、先ず定散善に警告を発し、注意を喚起し給いし恩召しの程  
も拜察さるるようであります。

抑々、救道途上の人には、道徳的にいえ、寧ろ眞面目な方が多くて、その心状から反省も深く、又道に入る事も速かで  
ありますが、その眞面目の性質にわざわいされて、いつまでもこの自力善に固執しつゝ終に大悲に全托し難い事になるの  
であります。

先きつ日、幾十年聽聞に親しみ、今や八十になんなんとする一老翁が、信仰問題を打ち出して御たずね下されたのであ  
りますが、同氏は今や往生の日の近づきつゝあるに当り、聽聞の結果地獄一定の罪惡性もわかり、眞に行きつまれる事を  
信じ、かかる浅間しき私を御目當の御本願であり、極樂往生疑いなく、報謝の称名につとめて居り、少しも筋合に疑問は  
残らないのですが、そして、九分九厘安心してゐるのですが、猶、心のドコかの隅に不安の情が残りて居りまして、明朝超  
絶といふ氣持になれませぬ。云わば薄紙一枚がままになりませぬと訴えられたのでありました。老い先の長からぬを思  
信の未だ成らぬを憂えて、涙を流してオエツされての眞剣な質問であります。幾十年の聞法も僧王本願の信に到らず、  
邪定聚に残るのは同氏宿善の開けぬ所いか、求道の志薄きせいか、將又、善智識に遇えない宿業か、然しその責任は蓋し  
同氏にのみ帰する事は出來ない事と思います。世の布教人が生硬不徹底な定散信を誤り傳えてる所以もあるのであろうか  
と考えるのであります。

私は直に同氏の告白上に定散心の影を認めて、早速次のように申上けたのであります。

尊下が幾十年聽聞して学んだ教理を覚えて、我身の罪惡性を鵜呑みにし、又極樂往生に間違いないと確信したようでも、それは凡夫の迷妄心より自信したる仮の信仰であつて、如何に確実なりと思うて見ても、又如來より廻向せしめ給いし  
他力信でありと見て見ても、その事自らが、結局自己の計らいであり、この自力できめた信仰の強さ、正しさ、又間違  
いなき諸善を評價し、モ一九分九厘本物になりましたと、自ら許す事、それ自らが、実に六合に光る佛光を素直に頂かず  
して、自らの計らいで限つた微妙な分別智を以て自己を飾り、思い上つた憐慢の相、邪見の考えに過ぎない事でしよう。  
何といふ己れ知らずの態度でしようか。しかも薄紙一枚を破れば本物になる事を予想しながら、その薄紙一枚が破れぬ程  
な微力又無力の自己の眞実を知らず自惚てる相こそ、いよいよ佛様に対しいみじき逆惡の姿ではありませんか。定散善  
も亦いみじき罪業であります。正邪もわかな是非も知らぬと祖聖は唯々大悲心一つを仰がれたのであります。貴下は、知  
らず知らず定散心の仮善を力にし自己の全部が地獄一定の逆惡人という事を心解し給わず、聞いたものの上にのみ之を仮  
想してゐるに過ぎないのであります。

それ程に橋慢の貴下をこそ、それ故に、いよいよ地獄に墮することを久遠の昔より見抜き下されて、あくまで救わんとするヤルセなき佛陀の大眞実である事を、その業塊直上に御感戴下さいませ。佛かねて知るしめして煩惱具足の凡夫と警告されつつ、あくまで自惚るより外なく、迷惑極まりなき尊下をお見抜き下されて、いよいよ捨て置けないのである。薄紙一枚で助かると自惚れ、九分九厘出来たと高上りし、然もいつまでも不安に苦しみ焦燥に煩うより他なき尊下を抱くまで捨て給わす、その位の橋慢は汝の自性のやみ難きものである事を万万御承知の上で御引き受け下されて、必らず守り通し淨土に送るであろう、万一誤つて地獄に墮つれば、佛も亦予め地獄に待ち受くるぞとの大慈悲一ツを聞かせて頂ければ、只々ざんぎ感謝の外なく万事をおませ申し上ぐる外ないでしよう。翁は靜聽数刻、感涙にむせびつゝコレハコレハ……コンナ奴ヲ……と唯々渴仰の血涙に終始し、始めて安心しましたと大喜踊躍歸途に就かれました。信に生くる人の相を目撃して今更ながら廻心の現相に驚喜したのでありました。定散善の如何に信への路を沮害するかをいよいよ知らせて頂きました。

### 徒然草抄

寸陰おしむ人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人のたためにには、一錢かろしといへども、これをかさねれば、食しき人を富める人となす。されば商人の一錢をおしむ心切なり。利那おほえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期たちまちにいたる。

されば道人は、遠く日月を惜じむべからず。唯今の一念、室しく過ぐることをおしむべし。

## 仰ぎましようよ慈光

松

村

繁

雄

「慈光を仰ぐ」などと申すと佛縁の無い人達には、或は病弱な人達がエタイも知れない賣薬にも吸いついて行くと同様に意氣地のない人間共がその煩わしい心を癒そうがため何物かを拜もうとする「觀念」であるように見え、勝てる者、意志の強い者には「阿房らしい」事であり、無闇心であつてよい事と思えるでありますよう。

ところが、茲に佛縁目出度く慈光を仰がして貰つて見ると、それは全然反対で、「慈光を仰がない」という事はたとえば太陽の下にあつて光を見得ない盲の如く、或は又、親の慈愛の懷に抱かれて居てそれを知らない白痴の如く、之は人生的一大悲しみであり、祖師聖人が「もし又此度疑網に覆蔽せられなば更りて又曠劫を運屋せん」と悲泣し、「まことなるかな攝取不捨の眞言、超世稀有の正法、聞思して遅慮する事勿れ」と絶叫したもうところで、私共も是をどうして歎かずに居られましよう。まことに「無常の悲しみは眼の

私は前号に於て、私共のどうしても逃れられない「當の苦惱」、つとめればつとめる程行き詰つてしまつ「して見ようなき悲しみ」が「慈光」を仰ぐ事によつてはしから温められ

解かされて行く事実を語り、救いが現前の事実である事を述べたのであります。それ等の事も佛縁の無い方々のためには、「諦めんがための觀念」と聞え、「意志の強い者のためには不必要な事」と思えて、なか／＼人の心眼に触れないでありますよう。けれども、「慈光に救われる」と云う事はそんな小さい問題でなく、たとえばアノ嵐坂寺靈現記の沢一の

よう、開く筈のない盲の眼がパツチリと開いて、今迄見る事の出来なかつた世界——縁の山や清い流れが——しみぐと眺められ、今迄仰ぐ事の出来なかつた光——限なく照らしている太陽の光——がほれぼれと仰がるようになると同様に、慈光を仰いで見ると、はじめて今迄見得なかつた自分の姿——人間の本統の姿——が見得、從つて「見さして下さる靈光」がしみじみと仰がれて、その、慈光の偉力に調伏させられている自分である事が分つて、全く「自力」の必要がなくなり「他力」の働きの中にはつぱりと攝取され、安々と、ハツキリと、両手離して人生を渡らして貰うところの徹底した安樂境を恵まるるに至る。即ち「大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮びねれば至徳の風静にして衆禍の波轉する」と云う、至上至徳の世界に轉入せしめらるるのであります。是は驚くべき大問題であるのです。

ここは一つ、今迄佛縁に恵まれ給わぬ方々によくお聞き願いたい所、そうして、どうしても御理解いただきたい所であります。然し「盲」には光が理解出来ないよう、久遠の盲の人生が慈光を理解すると云う事は猫に人智を理解せよと云うに等しい至難の事であつて、幸に、私のこの拙文がお読み下さる方の若し一人でも佛縁に近づき給う機縁となり得たらとしたら、それは、御眞実の不思議の力であります。そこで、私は次のような譬え話を申して見たい。

アノ「猫」をごらんなさい、猫はネズミを捕つて食べて腹さえ太ければ縁先で日向ほっこをするのであります。然し對無得の佛の世界に融化させられるのであります。まことに、「超世の悲願聞きしより我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身は変らねど心は淨土に遊ぶなり」と云う身の上にさせられるのであります。

そこで、「煩惱具足」とはどう云う事であるか?。それは佛様のみがよく御承知下さる事であつて、煩惱具足である私には煩惱具足である事は分らないのです。私は、「煩惱具足を知り得ない程の煩惱具足」であるのです。その、それ程の煩惱具足にどうして煩惱具足が見えるのか?。猫にどうして「俺は猫」と氣がつくのか?。猫のチエで「俺は猫」と分ろう筈がない如く煩惱具足の私に「煩惱具足」と分ろう筈がなく、猫の思案で「人間の世界」が分ろう筈がない如く煩惱具足の私に「佛の眞実」が分ろう筈が無いのです。にも係らず今、おほろ氣ながらも煩惱具足を思い、ほそ／＼ながらも佛の眞実が聞えて來ると云う事は全く私のチエでなく、私の思

策でなく、私の発見でなく、無窮に光る眞実のチエと、無量

「猫」と云う自覺もなく、人間の世界を覗くチエもありません、ところが、其の猫に「俺はネズミを捕るだけを仕事にし、腹さえ太ければ眠つてしまつところの(猫)だ」と云う自覺が若し出來たとしたら、それは、猫は猫でも「目の覚めた猫」であり「人間の世界に飛躍する幸福な猫」であります。今私がお慈悲を聞くと云う事は、猫が「俺は主人の膝に抱かれている猫だ」と知る事であり、「俺はネズミを捕る事と日向ほっこをするだけで、生死も思わず、罪惡も知らない無智な猫だ」と自覺する事であり、「わが主人は俺が猫である故に可愛がつて呉れるのだ」と自覺する事であり、從つて、「俺は、主人のそのようなチエと慈悲の膝に抱かれている猫だ」と自覺する事であつて、その事は「可愛がられている事を知る」というだけでなく、そこには次に述べるような驚くべき事柄があるのです。

### 不可思議の願力

猫にどうしてそのような自覺が出來るのであるか?。右の譬え話は、話自体が不自然であつて猫に於てはとてもそのような自覺が出來るものでないのですが、ところが私共には、今それ以上の不思議な事が実現しているのであります。

そこで、モ一度「猫」の話に戻ります。若し、猫に右の如き自覺が出來たとしたらどうでありますか?。それは、猫は猫なれどもその目には人間の世界が見え、その耳には人間の耳を覺まさして下さるのでありました。私が「知つた」のではない、久遠の昔より「私が知られていた」のであり、私が「見た」のでない、遙かな昔より「私が見られていた」のでありました。私は「徹頭徹尾理解されて居り、徹頭徹尾照らされている存在」であつたのです。かくて、「それ程迄に理解されている私」と知らされて見れば如何な迷いの私も遂に救われずにはいられない、光の中に包まれて仕舞わざるを得ないであります。

然らば、私はどう云う風に理解されているか?。苦惱の有情と理解され、罪の塊りと理解され、「いづれの業にても生死を離れる事あるべからざる身」、「うの毛羊の毛の先にある露ちりばかりも造る罪の宿業にあらずと云ふ事なき身」「地獄は一定住み家ぞかし」と理解されてゐるのです。その様な私である事を、かねて(久遠の昔より)理解して「苦惱の有情よ」と呼ぼう声、それが佛のみ声であつたのです。それこそ私を照らす声、眞実の声、眞理の声、同情の声、絶対の声ではありませんか。祖師聖人が、「親鸞においてはただ念佛して彌陀に助けられ参らすべしとよき人の仰せを蒙りて信するほかに別の子細なきなり」と、ただ一筋に、佛の呼び声に信順したもう情景がここにしみぐと忍ばるるではあります

が出来るのです。「み光りの届きしものをおのが目で、見し  
と思うて惑う人かな」。然るを、わが智慧で眞実の世界が探  
られると思い込み、わが思策で眞理の泉が堀り出されると思  
う所に人間の智慧の根本的な錯覚があり、その錯覚が次から  
次へと迷路を深くして、遂に果てしも知らぬ混迷に陥つて行  
くのであります。哀れや如何なる哲学も終局に於いては遂に  
行き詰り、所謂「宗教」が遂に不徹底に終つてしまふことは、  
まことに悲しい事であるけれども人間としては一應やむ  
を得ない事でありましよう。噫、人誰か慈光を仰がずしてこ  
の、無明惡業の苦因を切る事が出来ましよう、まことに仰ぐ  
可きは慈光であります。

かの「教行信証」の序文に於いて、「竊におもんみれば難  
思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破  
する慧日なり」と讃仰し給い、「かるが故に知んぬ、圓融至  
徳の嘉号は惡を轉じて徳をなす正智、難信金剛の信樂は疑を  
のぞき証を得しむる眞理なり」と喝破して、「しかれば凡小  
修し易き眞教、愚鈍往き易き捷徑なり、大聖一代の教この  
徳海にしくはなし」とお示し下され、「穢を捨て淨を忻ひ行  
に迷ひ信に惑ひ、心くらく識すくなく、惡重く障り多きもの  
ことに如來の發遣をあふぎ、かならず最勝の直道に帰して専  
らこの行につかへ唯この信をあがめよ」と、身を以つてお奨  
め下れさ、「嘗弘誓の強縁は多生にも值ひがたく眞実の淨信  
は億劫にも得がたし、たまたま行信を得ば遠く宿縁をよろこ  
べ」と感佩しましまし「よろこばしき哉、遇いがたくして今

遇う事を得、聞きがたくしてすでに聞く事を得たり、眞宗の  
教行証を敬信してことに如來の恩徳の深き事を知んぬ」と感  
泣しますわけ、まことに尊き極みであります。  
慈光を仰ぐと云う事は、知つて、覚えて、諒解する事では  
ありません。如來の恩徳を仰ぐ事であります。佛様は、この  
無明の私に、無明の深い事、罪の重い事を知らして下さるの  
であります。この無明の私に、この罪障の私に、「さぞ悲  
しかろう」と降りそそいで下さる御親切であります。  
今日もまた玉のみ声のかかるなり

さぞ暗かろう 悲しかろうと

### 徒 然 草 拷

ぬしある家には、すすろなる人、心のままに入り  
くることなし、あるじなき所には、道行き入みだり  
に立入り、狐・ふくろふやうの物も、人氣にせかれ  
ねば、所えがほに入りすみ、こだまなどいふ、けし  
からぬ形もあらはるものなり。  
また鏡には色・かたちなき故に、萬の影來りてう  
つる。鏡に色・かたちあらましかばうつらざらま  
し。虚空よくものをいる。我等が心に念々のほしき  
ままに來り浮ぶも、心といふもののなきにやあら  
む。心にぬしあらましかば、胸のうちにそこばくの  
ことは入りきたらざらまし。

然し都合よくて病氣がなおり金が出來ても何か満足されぬ  
ものが残つて行く  
煩惱の涯のない者には、まよいのはてる時とてはない  
だから煩惱の解決を得られない者には、眞実の光明の現れ  
ようはずはない。

然し愚かな私は、なきなぐさめをあくこともなく求め求め  
て、本源の解決、煩惱の減を願わない。だからはてしない流  
轉がそのさだめである。よしんば多少心はむいてもすぐかき  
消されて水にかいだ絵のようである  
これをこそ、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生とおび下さるの  
である。

### 信 味 點 滴

○

きれいな槽にくまれた清水は、飲むにも、漱ぐにも、洗濯  
するにも、万事安心してつかうことが出来る。

若しその槽水に、僅か一滴でもバチルスがまじつたらそれ  
こそ大変である。

眞実の宗教は微塵の夾雜物もない純粹性が絶対に必要であ  
る。だから古今を通じて、眞実の宗教家は、生命にかけて  
も、眞・仮を分け、実・虚を明らかにし、邪・偽を拂つてい  
る。

宗教は自由だ。基督教もよい佛教もよい、そのよいところ  
をとつて自分の宗教にするのだ。

こうした説をきくといかにも理解力の豊かな、文化人の代  
表のようだが、実は宗教について全くの無智を告白している  
にすぎぬ。宗教的浮浪兒である。

病氣すると、病氣さえおつたらよい、金もいらぬ名もい  
らぬと眞剣に考える  
貧乏すると、金さえあればなあと、眞面目に考える

手にむすぶ水に宿れる月影の

あるかなきかに世を渡るかな

この和歌を夜更けの僧坊に咏する若僧の声に、漁信僧都は  
いたく感激せられて、御自身も和歌など作られるようになつ  
たときく。病床にあつてことに心ひかれる和歌である。

あるかなきかに世を渡る、かそかに日々をすごして行く、

その清閑さの淵源に本願が輝やく。

## 編集後記

六號の差送がおくれ皆様に御迷惑おかげいたしました。實は私が六月初旬に突然狹心症

の發作に見舞われ十二日から名大附屬病院に入院しました爲で申訴ありませんでした。

診斷の結果は心臓動脈の硬化による心臓の障害にて程度は軽いそうですが生活を静かにせねばならなくなりましたので講話や座談や旅行が出来なくなりそうです。然しました手でベンを持つて皆様にお目にかかりますよう。それにつけても慈光誌が唯一の私の働き場所となりました。

○  
講臺中に信友大塚氏から近角常觀先生の御講話の筆記「横超金剛心の体験」をお送り下さつたので早速掲げさせて頂きました。

○  
私の原稿は生死をはなれ得ない私共が、佛力の不思議によつて、生死を超えさせて頂く妙消息を述べました。

○  
山下氏の御原稿は自力作善に迷う者への適切なお示しと存じます。惡煩惱よりも善煩惱に迷わされ易いのがうぬぼれの強い我々の常であります。

○  
松村氏の慈光を仰ぐの題下の御原稿は前回からすでに七回に亘つて如來の救濟の説明をこまやかにして下さいました。御不審の點が

ありましたら山口縣仁保局区内仁保村松村繁雄氏へ御問い合わせるようにとの事であります。

○

今回も差送が多少おくれることと存りますが私が退院出来ますまで万事不行届の點を御許し願います。梅雨あけの空を病床から眺めながら、白雲悠々去來するに心引かれます

が、西に向つて飛び去る米機の爆音に朝鮮の危険を警告させられます。南北の朝鮮の問題がもう話し合いの機はすぎて、武力以外では解けなくなつたことはまことにいたましい限りであります。向うが悪い、向うがわるいばかりで、お互に自分のわるい所が反省出来ない五分と五分の徹底した世界、人間においてはそれ以上をどうしても超えられぬのです。

ここに聖人の御叫びを、なみなみならぬお叫びをきくのであります。

本願なくば三千世界は全くの闇であります。何處にミジンでも光があるのか。獨善と我慢と敵視と偏慢以外に何でありますよろか。「火宅無常の世界、煩惱具足の凡夫、よろづのことみなもつてそらごたはことまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはします」相對五分五分の修羅の世に唯一つへだて給わず捨て給わぬ慈光が徹る。この光、地に満てと石に刻み、紙に録して聖人

昭和二十五年七月十日印刷  
昭和二十五年七月十五日發行  
毎月一回十五日發行

定 價 一部金拾五圓（郵稅共）  
一年分金百八拾圓（郵稅共）

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九

編集兼 發行人 花田正夫

名古屋市千種區千種町馬走二八  
印刷所 千草印刷所

名古屋市千種區千種町馬走二八  
花田正夫方

、発行所 慈光社

振替口座番號 名古屋一〇四七〇番  
名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九

名古屋市千種區千種町馬走二八

花田正夫方